

## I. 導入

おはようございます。先週は使徒24章から、ローマ帝国のユダヤ州総督フェリクスと妻のドルシラにパウロが語ったことを学びました。パウロは、イエスの死と復活を告げ、正義と節制と来たるべき裁きに的を絞って語りました。これを聞いたフェリクスは怖くなりました。自分が罪人であることを知り、いつか裁きを受けると分かったからです。それでもフェリクスは、悔い改めてイエスに救いを求めることをしませんでした。いつかもっと都合のよい日が来るだろうと決心を先送りにしたのです。実際には、悔い改めに都合のよい日などありません。私たちの知る限り、フェリクスは生涯、罪を悔い改めませんでした。



Paul talks to Felix and Drusilla

先週の聖書箇所は、**使徒24:27**で終わりました。「さて、二年たって、フェリクスの後任者としてポルキウス・フェストゥスが赴任したが、フェリクスは、ユダヤ人に気に入られようとして、パウロを監禁したままにしておいた。」フェリクスは何でも先送りにする道德観の低い人でした。今日の聖書箇所では、新しくフェストゥスが登場します。この人は行動力があり、勤勉で正義感があると言われていました。フェストゥスがユダヤ州の総督だったのは、紀元59～62年ごろです。

使徒25:1-12を読んで、パウロの一件にフェストゥスがどう対処するか見ていきましょう。

## II. 聖書朗読 (使徒言行録25:1-12, 新共同訳)

25:1 フェストゥスは、総督として着任して三日たってから、カイサリアからエルサレムへ上った。 25:2 -3祭司长たちやユダヤ人のおもだった人々は、パウロを訴え出て、彼をエルサレムへ送り返すよう計らっていただきたいと、フェストゥスに頼んだ。途中で殺そうと陰謀をたくらんでいたのである。 25:4 ところがフェストゥスは、パウロはカイサリアで監禁されており、自分も間もなくそこへ帰るつもりであると答え、 25:5 「だから、その男に不都合なところがあるというのなら、あなたたちのうちの有力者が、わたしと一緒に下って行って、告発すればよいではないか」と言った。 25:6 フェストゥスは、八日か十日ほど彼らの間で過ごしてから、カイサリアへ下り、翌日、裁判の席に着いて、パウロを引き出すように命令した。

25:7 パウロが出廷すると、エルサレムから下って来たユダヤ人たちが彼を取り囲んで、重い罪状をあれこれ言い立てたが、それを立証することはできなかった。 25:8 パウロは、「私は、ユダヤ人の律法に対しても、神殿に対しても、皇帝に対しても何も罪を犯したことはありません」と弁明した。 25:9 しかし、フェストゥスはユダヤ人に気に入られようとして、パウロに言った。「お前は、エルサレムに上って、そこでこれらのことについて、わたしの前で裁判を受けたいと思うか。」 25:10 パウロは言った。「私は、皇帝の法

廷に出頭しているのですから、ここで裁判を受けるのが当然です。よくご存じのとおり、私はユダヤ人に対して何も悪いことをしていません。 25:11 もし、悪いことをし、何か死罪に当たることをしたのであれば、決して死を免れようとは思いません。しかし、この人たちの訴えが事実無根なら、だれも私を彼らに引き渡すような取り計らいはできません。私は皇帝に上訴します。」 25:12 そこで、フェストゥスは陪審の人々と協議してから、「皇帝に上訴したのだから、皇帝のもとに出頭するように」と答えた。

### III. 教え

使徒25:1をもう一度読みましょう。「フェストゥスは、総督として着任して三日たってから、カイサリアからエルサレムへ上った。」カイサリアに着いたたった3日で、新総督はすでにユダヤ人指導者に会いにエルサレムへ行こうとしていました。彼は、ローマ皇帝カエサルの命令を施行すると同時に、ユダヤ人のニーズに応える方法を話し合おうと考えていたのかもしれませんが。ユダヤ人指導者の一番の関心事がパウロに対する処分だと知り、ずいぶん驚いたでしょう。フェリクスはパウロを2年も監禁しました。2年経っても、パウロを殺そうというユダヤ人指導者たちの思いは薄れていませんでした。もちろん、フェストゥスには一言もそんなことは言わず、ただパウロをエルサレムへ移送してほしいと頼みました。実は、その途上でパウロを襲おうと企んでいたのです。



使徒25:2-3 「祭司長たちやユダヤ人のおもだった人々は、パウロを訴え出て、彼をエルサレムへ送り返すよう計らっていただきたいと、フェストゥスに頼んだ。途中で殺そうと陰謀をたくらんでいたのである。」フェストゥスはこの依頼を聞き入れず、カイサリアに下ってくるようにと言いました。ここでもまた、ユダヤ人たちはパウロを重い罪で訴えましたが、その訴えを裏付ける証拠を提示することはできませんでした。



パウロも再び身の潔白を主張しました。使徒25:8 「パウロは、『私は、ユダヤ人の律法に対しても、神殿に対しても、皇帝に対しても何も罪を犯したことはありません』と弁明した。」フェストゥスはちゃんとした人のようですが、やはり政治家です。総督としてうまくやっていくには、ユダヤ人指導者の協力が欠かせません。エルサレムで裁判を受ける気があるかとパウロに尋ねて、彼らの好感を得ようとします。ユダヤ人たちがパウロを待ち伏せて殺そうとした過去があることを、新総督は知らなかったのでしょう。一方、パウロは自分の身の危険を十分わかっていました。

使徒25:10-11 「25:10 パウロは言った。『私は、皇帝の法廷に出頭しているのですから、ここで裁判を受けるのが当然です。よくご存じのとおり、私はユダヤ人に対して何も悪いことをしていません。 25:11 もし、悪いことをし、何か死罪に当たることをしたのであれば、決して死を免れようとは思いません。しかし、この人たちの訴えが事実無根なら、だれも私を彼らに引き渡すような取り計らいはできません。私は皇帝に上訴します。』」パウロには、次に出廷したらどう弁

明するのが一番良いかを考える時間が2年もありました。ここでパウロは、ローマ帝国の市民に与えられた権利を主張します。その中に、不当に訴えられた場合に皇帝に上訴する権利が含まれます。フェストゥスは陪審の人々と協議してから答えたとありますが、パウロが皇帝に上訴した時点で、フェストゥスには他の選択肢はありませんでした。そこでフェストゥスは、ローマの皇帝のもとへパウロを送ると宣言しました。

パウロをローマへ護送する手配には数日かかります。このころ、アグリッパ王と妹ベルニケがフェストゥスを表敬訪問しました。その後どうなったか、続いて使徒25:13-27を読みましよう。

#### IV. 聖書朗読 (使徒25:13-27, 新共同訳)

25:13 数日たって、アグリッパ王とベルニケが、フェストゥスに敬意を表するためにカイサリアに来た。 25:14 彼らが幾日もそこに滞在していたので、フェストゥスはパウロの件を王に持ち出して言った。「ここに、フェリクスが囚人として残っていた男がいます。 25:15 わたしがエルサレムに行ったときに、祭司長たちやユダヤ人の長老たちがこの男を訴え出て、有罪の判決を下すように要求したのです。 25:16 わたしは彼らに答えました。

『被告が告発されたことについて、原告の面前で弁明する機会も与えられず、引き渡されるのはローマ人の慣習ではない』と。 25:17 それで、彼らが連れ立って当地へ来ましたから、わたしはすぐにその翌日、裁判の席に着き、その男を出廷させるように命令しました。 25:18 告発者たちは立ち上がりましたが、彼について、わたしが予想していたような罪状は何一つ指摘できませんでした。 25:19 パウロと言いつ争っている問題は、彼ら自身の宗教に関することと、死んでしまったイエスとかいう者のことです。このイエスが生きていると、パウロは主張しているのです。 25:20 わたしは、これらのことの調査の方法が分からなかったので、『エルサレムへ行き、そこでこれらの件に関して裁判を受けたくはないか』と言いました。 25:21 しかしパウロは、皇帝陛下の判決を受けるときまで、ここにとどめておいてほしいと願い出ましたので、皇帝のもとに護送するまで、彼をとどめておくように命令しました。」

25:22 そこで、アグリッパがフェストゥスに、「わたしも、その男の言うことを聞いてみたいと思います」と言うと、フェストゥスは、「明日、お聞きになれます」と言った。 25:23 翌日、アグリッパとベルニケが盛装して到着し、千人隊長たちや町のおもだった人々と共に謁見室に入ると、フェストゥスの命令でパウロが引き出された。 25:24 そこで、フェストゥスは言った。「アグリッパ王、ならびに列席の諸君、この男を御覧なさい。ユダヤ人がこぞつてもう生かしておくべきではないと叫び、エルサレムでもこの地でもわたしに訴え出ているのは、この男のことです。 25:25 しかし、彼が死罪に相当するようなことは何もしていないということが、わたしには分かりました。ところが、この者自身が皇帝陛下に上訴したので、護送することに決定しました。 25:26 しかし、この者について確実なことは、何も陛下に書き送ることができません。そこで、諸君の前に、特にアグリッパ王、貴下の前に彼を引き出しました。よく取り調べてから、何か書き送るようになりたいのです。 25:27 囚人を護送するのに、その罪状を示さないのは理に合わない」と、

わたしには思われるからです。」

## V. 教え

この個所に登場するアグリッパ王とは、ヘロデ・アグリッパ二世です。アグリッパとベルニケは兄妹ですが、ユダヤ人歴史家ヨセフスによると、ふたりは近親相姦を犯し、事実婚関係にあったといます。先週登場したドルシラは、アグリッパのもう一人の妹です。ドルシラは総督フェリクスにたぶらかされて夫の元を去り、フェリクスと結婚しました。

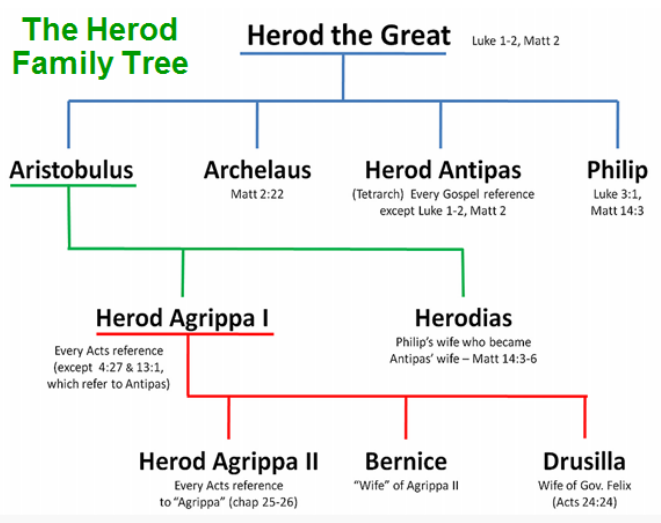
この三人の父はヘロデ・アグリッパ王一世です。これは、使徒12章で登場するヘロデ王で、ヤコブを殺し、ペトロを捕えた王です。後に、群衆から神と称賛され、それを受け入れたことで、主の御使いに打たれ、虫に食われて死にました。

ヘロデ・アグリッパ王一世は、ヘロデ大王の孫です。ヘロデ大王とは、マタイ2章でベツレヘムの男の赤ちゃんをすべて殺すよう命じ、イエスを殺そうとした王です。この家系図でわかるように、ヘロデー族のうちの9人が新約聖書に登場します。アリストブラスは聖書に登場しません。紀元前7年、24歳という若さで父親のヘロデ大王に殺されたからでしょう。

ヘロデ・アグリッパ二世は、ヘロデー族の最後の王で、ユダヤ教信仰と歴史に精通していました。彼はシリアを支配し、エルサレムでは絶大な影響力の持ち主でした。神殿宝庫の監督権、および大祭司の任命権を持っていたからです。

アグリッパ王は、パウロについてすでに聞いていた可能性があります。それで、フェストゥスがパウロの件に触れた際、興味を持ったのでしょう。アグリッパ王の依頼を受け、総督フェストゥスは、アグリッパ王がパウロの話の聞けるよう一席を設けました。使徒25:23「翌日、アグリッパとベルニケが盛装して到着し、千人隊長たちや町のおもだった人々と共に謁見室に入ると、フェストゥスの命令でパウロが引き出された。」

その集まりは裁判のように見えたでしょうが、フェストゥスはパウロが皇帝に上訴した事実を挙げ、それが裁判でないことを明言しました。冒頭に、フェストゥスはこう言います。使徒25:25「しかし、彼が死罪に相当するようなことは何もしていないということが、わたしには分かりました。ところが、この者自身が皇帝陛下に上訴したので、護送することに決定しました。」フェストゥスはパウロを改めて法廷に立たせているわけではありません。むしろ、パウロをローマに護送する理由を皇帝にどう説明すべきか考えていました。使徒25:27で次のように続けます。

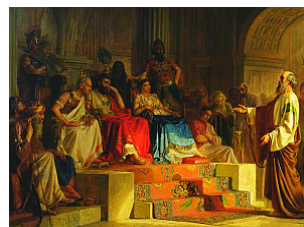




「囚人を護送するのに、その罪状を示さないのは理に合わないと、わたしには思われるからです。」

パウロの一件は、総督フェストゥスにとって謎でした。前任のフェリクスは、パウロを2年間も拘束しましたが、特定の罪状について告発してはいたわけではありませんでした。というのも、パウロが悪事を働いた証拠がなかったからです。ユダヤ人指導者たちはパウロに死罪を望んでいました。フェストゥスは彼らの感情を損ないたくはありませんでしたが、正式な有罪判決もなくパウロに危害が加わることを見過ごすわけにはいきませんでした。パウロがローマ帝国の市民権を持っていたからです。渦中のパウロは、皇帝へ上訴しました。市民からの上訴はローマへ送られることが法律で決められていました。しかし、パウロをローマへ護送するには、この一件の概説を文書にしなければなりません。その内容について、ユダヤ人事情に詳しいアグリッパから何らかの助言を得ることをフェストゥスは期待していました。これについては来週、見ていきたいと思えます。

話を進める前に、ニコライ・ボダレフスキによる絵画をご覧ください。この場面について考えてみましょう。集会が開かれ、有力者が集まります。アグリッパ王とベルニケが盛装し、入場します。総督フェストゥスもローマ式的美装をこらしたでしょう。この3人は揃って王座に着きました。アグリッパ王が妹にも女王の称号を与えていたからです。ここに、鎖に繋がれたパウロが連れてこられました。



地域の要人たちの前に立たされたパウロは、取るに足らない人間に見えたことでしょう。しかし、パウロの言葉を王が聞けるようにと開かれた集会だったことを考えると、ここで本当に重要な人物は誰でしょうか。使徒9:15で、パウロについて主がアナニアにおっしゃったことを覚えていませんか。「すると、主は言われた。『行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。』」ここまで使徒言行録を学ぶ中で、クリスチャンを懸命に迫害していたサウロが主に変えられて、異邦人のための使徒パウロになった次第を見ました。今日の個所は、パウロが王と総督の前に立ち、証を語った印象的な場面です。

来週、アグリッパ、ベルニケ、フェストゥスをはじめとする要人の前で語ったパウロの証を見ていきたいと思えます。パウロは、イエスと出会う前の人生について、ダマスコへの途上でイエスと出会ったことについて語ります。その後の生き方についても語ります。また、イエスの死と復活や、ユダヤ人と異邦人のために神が備えられた救いについて語ります。この救いは、世の光であるイエスを信じるすべての人のためのものです。アグリッパはどのような反応をするでしょう。それは来週お話しします。



## VI. 結び

マタイ19:28-30で、イエスはペトロの質問にお答えになります。弟子たちの忠実な奉仕にど

んな報いがあるのかと問われ、「19:28 イエスは一同に言われた。『はっきり言うておく。新しい世界になり、人の子が栄光の座に座るとき、あなたがたも、わたしに従って来たのだから、十二の座に座ってイスラエルの十二部族を治めることになる。19:29 わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子供、畑を捨てた者は皆、その百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ。19:30 しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。』」

当時、アグリッパ王などヘロデー族は、先にいる者でした。今となつては、歴史に埋もれ忘れ去られた存在です。一方、イエスの弟子たちが残した遺産は、世界中の教会です。また、パウロの書簡は新約聖書の約半分を占めます。へりくだってイエスに従い、人々に仕えた弟子たちは、あらゆる意味で先にいる者となりました。

この世の偉大さに通じる道は、権力や財力、名声です。しかし、神の王国では、上を目指すには下に行かなければなりません。マルコ9:35にはこうあります。「イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。『いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。』」

今日、野心というものはあまり好まれません。日本では特にそうでしょう。野心と私利私欲を直結して考えるからかもしれません。しかし、人に祝福をもたらそうという野心、つまり大きな志を抱くなら、これは私利私欲とまったく関係ない良いものです。使徒パウロは、歴史上屈指の野心家だと言えるでしょう。世界に救いの福音を告げ知らせることや、ユダヤ人も異邦人も、男も女も、王も奴隷も同様に、キリストを信じる信仰を持つようになることを熱望していました。この志を実現するため、彼は喜んでへりくだり、あらゆる方法で人々に仕えました。私たちはどうでしょう。パウロのような志を抱いているのでしょうか。

1876年、北海道大学の前身である札幌農学校の設立のため、50歳のクラーク博士が来日しました。札幌にはクラーク像があり、台座には「Boys, be ambitious (少年よ、大志を抱け)」と彫られています。この言葉には続きがあり、クラーク博士は「Boys, be ambitious for Christ. (少年よ、キリストのために大志を抱け)」と言ったのだといわれています。これこそ、良い野心です。パウロが持っていた類いの野心です。私たちが持つべき野心です。



この世のものを追い求めても、行く手には孤独と失望が待っているだけです。神の御国とよめがえった主イエスの栄光を追い求める大志があれば、キリストの愛によって多くの人に祝福をもたらす喜びが与えられます。自分自身に問いかけてみましょう。私はキリストのために大志を抱いているだろうか。イエスの愛で人を愛するには、どうすればよいだろうか、と。祈りましょう。

## VII. 祈り